

## 『大東合邦論』の朝鮮観

(一)

欧米列強の侵略に抗するため日本と朝鮮が対等なかたちで合邦すべきだと主張した樽井藤吉『大東合邦論』の評価に、再検討のきっかけをもたらしたのは、一九六三年刊行の『アジア主義』における編者竹内好の解説「アジア主義の展望」<sup>(1)</sup>であった。戦前には大東亜共栄圏構想の思想的先駆としてもちあげられ、戦後は侵略主義の一形態と片付けられていた樽井の合邦論に対して、竹内は「日韓両国が平等合併せよという主張は、樽井が誇っているように、たぶん彼の創見であつて、しかも絶後の思想ではないか」と、極めて高い評価を与えた。侵略思想か連帯思想かというアジア主義に関する二者択一的論議への批判の一環として提出されたものであつたが、折から日本資本主義のアジア進出が本格化するにもなつて対アジア認識のあり方が厳しく問い直される状況のもと、竹内の発言は大きな波紋をなげかけることになる。日韓条約反対闘争が高揚をみせるなかでこの竹内の問題提起をうけとめ、纏められたのが旗田巍「樽井藤吉へ大東合邦論」<sup>(2)</sup>および「樽井藤吉の朝鮮観」であつた。旗田はそこで、樽井が連帯意識

吉野 誠

をもっていたことを承認しつつ、なおかつ自覚的・無自覚的に侵略主義へ傾斜していった経緯を、彼の思想展開自体の必然的な帰結として明らかにしなければならぬと主張する。そして、樽井の思想には本来的に侵略そのものを否定する観点が希薄であり、とりわけ日本の膨張政策への批判がなげかりか、むしろそれを積極的に肯定・賛美するものだったと指摘した。こうした性格をかかえていたことが、日清・日露戦争をはさみ朝鮮の植民地支配が現実化する段階において、侵略を支える思想としての役割を担うことになつた原因だとするのである。侵略か連帯かの性急な峻別が複雑な展開を示す思想の分析に有効性を欠くのはいうまでもないが、両者をわかつ思想的契機を抉出しないう限り、連帯運動の実践的な指針の形成に寄与することができないのも事実であろう。かくして、樽井が主観的には連帯意識をもちながら、なにゆえ現実の朝鮮侵略政策に対して批判的な観点をもちえなかつたのか——、この問題を追究することが、当面の課題として設定されなければならぬ。

ところで、竹内が「彼は洋学の素養がない。だから彼の合邦論は、いささかコジツケの観がなくはないが、それだけに今日かえ

りみてきわめて新鮮である。洋学者たちにはこの独創は思いつか  
なかつたろう」と述べて、樽井の「創見」が生み出された根拠を  
東洋の伝統的な思考様式に求めようとしたのに対し、鈴木正「東  
洋社会党の創設者——樽井藤吉」は、「大東合邦論」をよんで  
驚いたことは……西洋の理解（それはとくに西欧近代の民主主義  
の理念にたいする十分な尊敬をこめた）をもって合邦論が展開さ  
れている点である」として、その「近代的性格」を強調した。

「矛盾に満ちた樽井の思想を徹底的に分析して発想の根源を追求  
する」ことを課題にした伊東昭雄「『大東合邦論』について」<sup>(5)</sup>は、  
樽井の文明観の基礎にある概念として「競争」と「親和」に注目  
する。西欧社会の構成原理である「競争」に対し、アジアの原理  
たる「親和」により高い価値を見出そうとする点で、樽井の思  
想は福沢諭吉の脱亜論などと違っていた。だが、この概念は近代  
化論への批判を内包してはいるものの展開が不充分であり、結局  
のところは「近代化を肯定することにより、かなりのものを福沢  
と共有」していたという。鈴木が、近代的性格をもつが故に樽井  
の合邦論を「単純に排外的・侵略的アジア主義者ときめつけるこ  
とは速断」だとしたのに対して、伊東の場合は、近代化論を克服  
しえていない点に樽井の限界をもとめるわけである。さらに、初  
瀬龍平「アジア主義と樽井藤吉」<sup>(6)</sup>は、『大東合邦論』における国  
際関係認識のあり方を分析して樽井を「近代主義者」であったと  
断じ、そのような性格との関連において「連帯から侵略への思想  
的帰結のメカニズム」を説明しようとしている。

右のような諸研究を念頭において、本稿では、「朝鮮情況」と  
題する章を中心に、『大東合邦論』における樽井藤吉の朝鮮観を  
検討してみたい。

## (一)

日清戦争前年に初版が刊行された『大東合邦論』<sup>(7)</sup>は、日本人の  
みならず朝鮮人や中国人をも読者として想定したものであった。  
そのために漢文で書いたと、樽井自身が述べている。そのなかで  
も「朝鮮情況」の章は、朝鮮人読者を意識し、合邦がいかに朝鮮  
のため必要不可欠であるかを説得しようとする箇所だった。樽井  
はここで、まず、「小かつ貧にしてその危機すでに迫」っている  
朝鮮が、「他日よく富強開明を致すか」「はたして興隆の徴すべ  
き者有るか」(七五頁)と問題を提起する。「富強開明」「興隆」  
こそが朝鮮にとって最大の課題であるとしたうえで、そのための  
方策を考えようというわけである。そして、「既往は現今の因、  
現今は将来の因」であるから、将来への対策をたてるためには  
「既往の成迹を推してその由来する所を明らかにし」(七六頁)  
なければならぬと述べて、歴史の考察を行なう。

樽井が指摘する朝鮮の歴史の特質は、自主性が欠如しているこ  
と、発展がみられないことの二点に要約される。他律的かつ停滞  
的な朝鮮史認識というべきであろう。まず第一の点について、「己  
に在らざる者を持みて自ら勉めざれば則ち日に退き……人を恃め  
ば則ちわれ客と為り、客と為れば則ち人に制せらる」(七六頁)と

強調した樽井は、朝鮮が不振に陥ったのは歴史的に自主の気風がなかったからだと述べる。すなわち、上古において檀君は「西北」より、次の箕子や衛滿は「漢土」から朝鮮へ来て支配者になったもので、「爾來二千余年、国人には自立して王と為る者無」き状態が続いた。三国時代に至って「国人はじめて君長と為り……自主の気象はじめて生」じたが、「三国の外に任那、安羅、加羅等の分裂有り……当時、韓土はわが日本に隸」していて、「その自主はなお未だ長ぜざる」状況にとどまった。新羅が朝鮮半島を統一するにおよんで、「その自主ようやく長ずる」に至る。しかしながら、「なお唐に事え、爾後、金に、元に、明に、清に、唯だ命これを聴き以て今日に至」ったのであって、「その自主なお未だ發達せず」(七七頁)というのが実情だったのである。

「議者有りて……曰く、朝鮮は古より名は他邦の藩屏たり。然れどもその実は未だかつてその独立たるを失なわざるなり」(八二頁)と樽井自身が反論を紹介する如く、中国歴代諸王朝との冊封関係の實質をどのように理解すべきかは、議論の分れるところであろう。が、いずれにせよ、中国への事大が自主性を失なわせ、朝鮮不振の原因になったというのが樽井の主張であった。

第二の点、朝鮮の歴史を停滞的であると見る見解は、一種の發展段階論を下敷きしている。樽井によれば、世界の歴史は、「太古の人類、山間丘陵の地に抛り以て栖息す。洞窟の便に負うに依るなり」という〈山間丘陵の時期〉から、「木を伐りて巢を構ふるに及びて漸く平原に遷る」という〈平原の時期〉へ發展す

る。そして、「是に於て交通の便はじめて開ける。それ交通は開明の母」であるため、以後の歴史は交通の發達に従つて三段階に区分される。すなわち、河川による交通が主だった〈河流の時期〉から、「人民ようやく船舶漕運の術に熟れるに及び」て〈内海の時期〉に進み、さらに〈大洋及鉄道の時期〉へ發展するといふのである。河流の時期とはインド・パピロン・エジプト文明の段階、内海の時期はギリシャ・ローマの段階、大洋及鉄道の時期とはいふまでもなく「英国その他欧米諸國の隆盛を致すが如き」現時の段階に相当する。「國家の開明は地理これを導くもの有り」(七九頁) というように地理的決定論の色彩が濃厚だが、樽井はこれを西洋の學者の説として論じている。五段階の發展を経て現在の欧米諸國の繁榮が實現したのに対して、朝鮮は「平原広からず」「河流長からず」「船舶回漕の術に熟れざる」状況であったために「平原・河流・内海の三時期を失」ない、「その國小弱にしてその民は疲弊し、かつ政綱紊乱して治化廢類す」(八〇頁)というありさまに陥つたといふのである。

このように、自主性が不足し、地理的条件の不備ゆえ時運にのることができず、低い發展段階にとどまっているというのが、樽井の懐く朝鮮史像であった。そうした認識を前提に、「興國の策はその盛衰の原因およびその脈絡を察し、その害の由来する所を避け、その利の由起する所に就くに如くは莫し」(八五頁)との視点から、將來に向けての興國Ⅱ富強開明の方策が検討される。まず、自主性の欠如という第一の問題に対して、それが中国への臣從

によつてもたらされたとする以上、清国との宗属関係を断ち切る必要が説かれるのは勿論であらう。だが、樽井の主張はそれにとどまらず、日本との提携こそ自主性強化の途だといふところに眼目があった。「朝鮮はまた宜しく日本の気象・漢土の文章を取り以て降運を致す」(七六頁)と述べ、朝鮮の歴史展開をもっぱら中国および日本からの他律的影響の産物とする樽井は、わずかながら認められる「自主の萌芽」もことごとく日本から伝来したものとみなす。三国時代に自主の気象が生じたのは「漸く日本と交渉するようになったからであり、三国のなかでも新羅の発展が著しかったのは「三韓中新羅もつとも日本に近く、故に韓人にて先づわが気象に伝染せし者は新羅」だったからだとされている。樽井によれば、日本は自主を尊ぶ国で、「開闢以来陸を他邦に屈せざる」唯一の国であった。「新羅一統以来自主の気象却つて展ぜざるは、その日本に親しまず漢土に親しむに因る」(七八頁)のであるから、自主性を養うには中国への事大をやめるばかりでなく、日本と手を結ばねばならないと主張するのである。

ついで、大洋および鉄道を主要な交通手段とする発展の段階に至つている世界で、朝鮮が遅れをとりもどすにはどのような策が必要か。これが第二の問題であった。地理的条件を決定的とみる樽井は、この問題を、「三面の海・一面の陸」に囲まれた朝鮮がとるべき途は何かというかたちで提起する。そうしたうえで、シベリア鉄道との連絡により興隆を図ろうとする考えを、「その將來の利益は海に在りて陸にあらす。それ一利「一面の陸」は三益

「三面の海」に如す」(八五頁)という理屈でしりぞける。そして、「國人航海術に習熟すれば則ち海潮の達する所はみな鉄道なり。布設の費、修繕の勞を要せずして米國に達し、濠州に到る」のであるから、「興國の道はまず海外開明諸國と通商」し、しかるのちにロシア領や滿州と連絡して利益を得るのが最上の方法だと主張する。そこから導かれる結論が、「我日本群島その海面を圍繞す。我と和さざれば則ち何を以てその利を博するを得んや」(八六頁)というものであった。ここでもまた、日本と結ぶことこそが富強開明の途であるとの提案に帰着するのである。

以上のような主張が、「今、清國の力は能く朝鮮を援くるに足るか」と清國の非力を強調し、「俄國は今、志を東洋に伸さんと欲す」(八一頁)とロシアの侵略性を力説しながら、「友愛の至情」(七五頁)を押し出しつつ朝鮮人読者に向けて説かれる。日清戦争前夜の朝鮮をめぐる国際情勢のなかで、樽井の主張がどのような意味をもったかは想像に難くない。ここではともかくも、自主性を身につけ、発展の遅れを挽回して富強開明を実現する方法が、日本との合邦、すなわち「大東國」の結成であったことのみを確認しておこう。

### (三)

さて、アジア主義を脱亜主義の対極に位置するものと把えるならば、後者が欧米諸國を主軸に構成される近代国際社会においてそれと同質・同格の一構成員たるべく振舞おうとする志向性であ

るのに対して、前者はあくまでもアジアの一員たることを意識しつつ日本の国際行動を処していこうとする志向であるとするのが、もつとも包括的な定義といえよう。そして、アジア諸民族への実際的な対応からみると、脱亜主義にはアジアへの無関心から意識的な侵略論までの幅があり、アジア主義にも連帯から侵略までさまざまなヴァリエーションがありうる。思想内容からみた場合、脱亜主義がその性格からして近代主義Ⅱ西欧文明至上主義的であるのはいうまでもないが、アジア主義にあっては、近代主義的な潮流と、アジア文明そのものの中に西欧文明への対抗原理を見い出そうとする潮流——松本健一の言葉を借りれば「原理主義」的な潮流<sup>(10)</sup>——とを区別することが肝要であると思われる。アジア主義がおしなべて連帯意識に発しながら強硬な侵略論へ傾斜していったいきさつを、この二潮流の区別と関連させて追究しなければならぬ。

樽井藤吉の場合を考えてみると、先述の如く鈴木正らが指摘し、また本稿での検討からもうかがえるように、その合邦論は根本において近代主義的性格が濃厚であった。彼が究極の目的とする「興隆」「富強開明」とは、《太平洋及鉄道の時期》における欧米諸国の繁栄に倣い、追いつくことに他ならない。そして、古い伝統をもつが故に朝鮮は独立を全うできるはずだとする見解に対し、樽井は「習慣の国情を固結せるは以てその国を守るべくも、未だその国を興すべからざるなり」と反論し、さらに「富強と云い開明と云うは固より貧弱に安んじて陋習を守るの致す所に非ず。乃

ち日に新たに已まざるの結果なり。故にその国を興さんと欲せば則ち習慣と雖もまた破らざるべからざる者有り。故に曰く、習慣は未だ国を興すに足らざるなり」(八三頁)と述べて、伝統的なものへの否定的な姿勢を明らかにしている。伊東昭雄が詳しく検討した如く東洋文明の特質として「親和」を強調し、また家族制度に言及したりはしているものの、『大東合邦論』の論理展開の中ではそれらは合邦を容易にする条件として語られているにすぎない<sup>(12)</sup>。アジアⅡ朝鮮文明のなかに、あるいは朝鮮と日本の文化に共通する特性のなかに近代西欧文明を超越するための契機を発見し、それを原理にまで鍛えあげていくといった志向は、樽井の論理のうちに見い出すことは困難である。つまるところ樽井藤吉は、西欧文明至上主義的な自由民権派の一潮流のうえに位置する思想家にすぎず、いかなる意味でも彼の思想にアジア「原理」主義の徴候をうかがうことはできないであろう<sup>(13)</sup>。

近代文明を至上とする限から、樽井は朝鮮の歴史にもっぱら他律性と停滞のみを見た。そこからは、朝鮮文化自体のうちに価値をみいだそうとする姿勢は生まれようもなかった。「その国は未だ一大英雄の四隣を震蕩する者有らず。また未だ一大賢哲の一学科を發明する者有らず。その他、器械の構造、物理の講究、美術の精巧、技芸の秀抜、未だ万国に卓絶する者有らず」(七八頁)「兵勢・財力・器械および百般の学芸、他邦に勝る者有るか」(八三頁)というように、政治・軍事・経済はもとより学問・芸術にいたるまで全面的に態度が表明されている。相手方の社会・文化

に何らの価値も認めないとなれば、「先覚者」たる日本による近代文明の持ち込みが、朝鮮のためにも望ましいことと考へざるを得なくならう。<sup>(14)</sup> 旗田巍が指摘した如く、江華島事件以来の日本の朝鮮政策が肯定・賛美の対象となるのは必然であった。

こうした樽井の合邦論がかるうじて連帶論となる可能性を残しうるためには、朝鮮内部に主体的な近代化勢力の存在が確認されなければならぬ。樽井自身この点には気を使い、「忠奮義烈・悲壯慷慨の士無きに非」(八〇頁)とざることを強調している。だが、その数は「千百人中に求む可きのみ」というのが実情で、彼らの活動を背後で支えるべき国民の意識については「国人の気象独り旺盛なるや、余未だその然るを知らざるなり」(八三頁)と悲観的である。そもそも近代主義者の樽井にとって、現状変革の気概とは「数隻の鋼鉄艦を購う」(八四頁)如き努力をさす。東学農民や衛正斥邪派の動向はもとより祝野の外にあるのであって、主体的努力として注目されるのはもっぱら開化派の動きであつたらう。実際、合邦論の最初の日本語草稿が執筆されたという一八八五年当時、樽井は亡命中の金玉均に積極的なアプローチを図つていた。<sup>(15)</sup> 金らによる政権奪取の可能性は年とともに小さくなつてゆき、樽井もその事実を認めざるをえなかつたのである。

相手民族の文化に独自の価値があることを承認せず、そのうえまた主体的な変革勢力の存在をも認めないとなれば、外部からの近代化の働きかけは、それがいかなる善意にもとづくものであれ侵略以外の何ものとも言うことができないだらう。近代文明の高

処からアジアの停滞を打破してやろうとする主観的な善意——、この善意こそが徹底した侵略主義を生み出す根源であった。それは、脱亜主義とアジア主義とを問わず、近代主義が必然的にかかえ込まざるをえなかつた陥穽である。思うに、近代日本におけるアジア主義は、樽井藤吉を含めて近代主義的潮流のそれが大勢であり、原理主義的アジア主義の潮流は岡倉天心らをはじめとするごく少数の例外にとどまつた。しかもそこに、戦略論的な深化をみいだすことはできない。近代文明のなれの果てとしての様相を強めつつある現代の日本において、閉塞状況打破の可能性を探らうとするならば、まずもつてこの事実のもつ意味の解明が不可欠の課題とされなければならないであらう。

#### 註

- (1) 竹内好「アジア主義の展望」(同編『アジア主義』筑摩書房、現代日本思想体系9、一九六三年)。
- (2) 旗田巍「樽井藤吉〈大東合邦論〉」(『エコノミスト』一九六五年七月二七日号、同『日本人の朝鮮観』勁草書房、一九六九年に「大東合邦論と樽井藤吉」として再録)。
- (3) 同「樽井藤吉の朝鮮観——朝鮮併合の前夜——」(『朝鮮研究』四三、一九六五年九月、同右書に再録)。
- (4) 鈴木正「東洋社会党の創始者——樽井藤吉」(田中惣五郎『東洋社会党考』新泉社、叢書名著の復興11、一九七〇年)。
- (5) 伊東昭雄『大東合邦論』について(1)、『横浜市大論叢〈人文科学系〉』二四巻二・三号、一九七三年四月)。
- (6) 初瀬龍平「アジア主義と樽井藤吉」(『広島平和科学』一、

一九七七年)。

(7) 周知のとおり、樽井自身の言によると合邦論の日本語原稿は一八八五年に完成したが、大阪事件との関連で下獄する際に失なわれた。その後ふたたび起草し、一八九一年に雑誌『自由平等経綸』に二章の構成で連載された。さらに四章を加えたものが一八九三年に初版本として発行され、一九一〇年の日韓併合直前には再版が出た。三者の異同とそれともつ問題性に関しては、前掲の旗田論文および伊東論文を参照されたい。なお、初版本には長慶書林からの覆刻版(一九七五年)がある。

(8) 初版本、七五―八六頁。以下、本文中の引用は書き下し文に改めたもの。また、( ) 内の引用頁数は初版本による。

(9) 樽井の議論においては、日本と朝鮮の合邦という結論が予め設定されたうえで、それを説得するために種々の理屈を並べるといった趣が強い。山田昭次「甲申政変期の日本の思想状況——『大東合邦論』および大阪事件研究序説——」(林英夫・山田編『幕藩制から近代へ』柏書房、一九七九年)が、「朝鮮のナシヨナリズムに対し、日本の対朝鮮支配を受け入れさせようとした論理が『対等合邦』であり、『強い反日ナシヨナリズムをもつ朝鮮人を説得して合邦へ誘導する目的で書かれたもの』であったと断じている如くである。本稿の課題は、当時の樽井の真意がどこにあったかという問題からは一応はなれ、彼の主観的善意をひとまず顔面通りに受け入れたうえで、なおかつ『大東合邦論』における論理展開に即して問題点を探してみようとする試みに限定される。

(10) 松本健一『挾撃される現代史——原理主義という思想軸

——』(筑摩書房、一九八三年)。本書で松本は、「西欧Ⅱ近代に抵抗しつつ、これを超える文明的な原理を掲げる思想的なヴェクトル」近代に触発されつつ、それを全否定、超克するかたちで起こってくる思想、「イデオロギー」として原理主義という思想軸の設定を行なう。そして、イスラム革命をはじめとする原理主義の活動が盛んになる一方で、ゆきつまった近代主義が原理主義とリンクして管理ファシズムを現出させるという、原理主義の二つの様相によって挟み撃ちされているのが現代だとしている。幕末維新期の吉田松蔭や西郷隆盛朝鮮における東洋からイランのホメイニズムを原理主義として一つに括る大きなスケールの立論だが、近現代史の理解にとって極めて示唆的である。松本はさらに、近代主義と民族主義(ナシヨナリズム)とを二項対立的にしか設定しえなかった竹内好の限界を指摘し、ナシヨナリズムの中に近代主義に結合したものと原理主義に連接したものとを区別する視角が必要なことを説く。ここからアジア主義を、「日本あるいはアジアを文明の原理へと鍛え上げて、それによって西欧Ⅱ近代を超えようとする思想」「ナシヨナリズムを、アジアを文明の原理と据えようとする原理主義のほうに引き取るうとした思想」と定義づけている。だが、樽井や内田良平らをはじめアジア主義者といわれるものも多くが、アジアを原理とするような志向をもっていたかどうか、大いに疑問である。アジア主義のうちに二つの潮流をみるべきであろう。

(11) 他の章でも、「迷夢未だ覚めず。依然として古に泥むは時務を知る者と謂うべからざるなり」(序言・二頁)とか、「陋習に拘泥して一時の安きを偷むは自滅の道なり」(合同利害・

一一七頁)などと述べられている。

- (12) たとえば、「親和合同は東人天賦の性たり」(合同利害・一六頁)、「東亜諸国は家族たり。家族制度は一家を以て國本となすの謂なり。故に上下相保つての心最も切なり。故に合邦は固より東方諸国に適する者なり」(同・一一八頁)といわれる。

- (13) 竹内の樽井評価は、連帯の側面を重視した点、非近代的な性格において、さらにいえば原理主義的な方向にひきよせて理解しようとしている点で、二重に問題をもっている。竹内自身の志向を投影させた評価というべきだが、それ故に却って、真のアジア連帯主義の成り立つ可能性が、アジア「原理」主義の潮流にこそ存在するはずだということを示唆した点に、画期的な意義を認めねばならない。松本健一の『竹内好論』(第三文明社、一九七五年)での樽井評価は、竹内のそれを踏襲したものであるが、前掲新著においては樽井に関し言及されていない。

- (14) 「わが日本は亞洲の東極に位す。宜しく先覚者となり、以て友國の迷夢を破り、これを富強開明の域に導くべし。これ東極に在りて東号を冠する者の義務なり」(合同利害・一一六頁)という。

- (15) 前掲山田論文、参照。